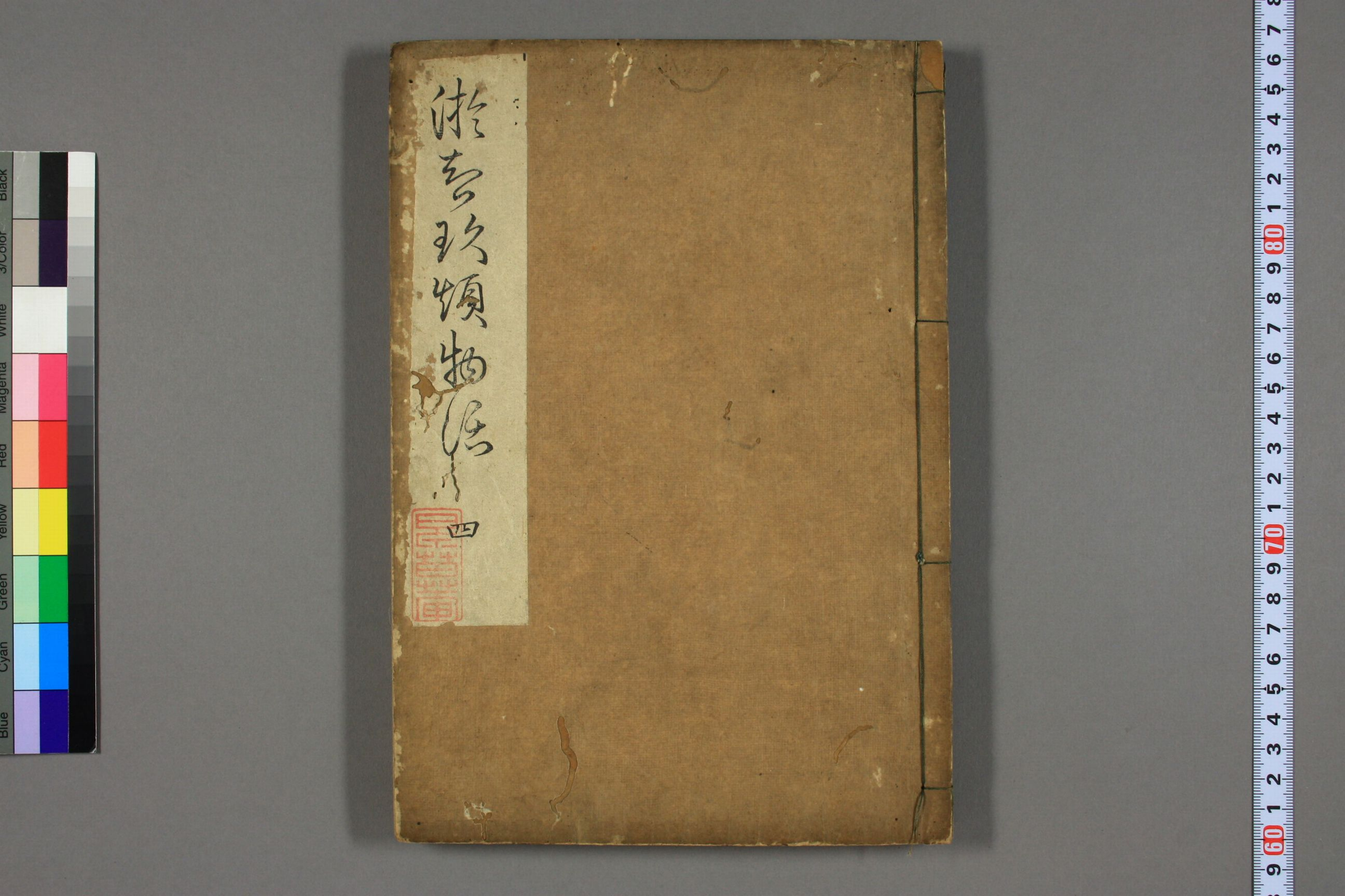
四

宮内庁書陵部

おもをくだもの法四

かくてやうく中納言たもくるやみ死へバ大納言いとほし
くおぼゆなほかよて修法ゆまさせを勢死へバ中納言、行う
ハ、ゝ去田ふるもゆらもゆ命をくも行らおとづらはし
く行のハ行りせをを死ふと申たまふ法やうう成
死へ去おもあべよなあり今ゝ去ゝし生てゆらバやと思ハ
象うゝ沈みてきふ法ふの弱葉に多くゝ去右
られてなりおとりつるなん砌よ思ひ入る我妻のかぎろ
思死ふ法世ゝ命ぶよあらぶなりねと思ひめるに
又ゝ死をバ我方ゝ大納言に成まゝよ報ゝてゝ

それと、見のみそ厨で思ゆる事、けてハ老のはて死
の果おもぶてしさハおのれまゝ法人世ゝあらぶと
ゝ孫ゝ子を、大納言孫ゝて、あるそれよ思ゆるるかおりれし、
女房、いのでは大納言をぶれ、一人なしまりて、ひうめるまを
しと思ハせまらんとのゝまふを、中孫るてぶりふるハやと
おぶをとぶ、ゝりおの大納言ゝなきうんるす、人の郷
とるべきにあらもで、家のを廣らんけんつまて、父おとぶせ
法許よまうで孫なて、かくなん思孫へるを、をきれよ老
ども多く侍れどそれぶ法をえにぶよ行ま、ぶるす
にもけらめうはりにハ法のるすを老けらんと思ひけるみけ

しきゝゝう宣めさせ孫へとゆけを孫ふ何のけ思ハん
るすをゝゝゝけるべゝゝうに業ゝまらせゝ、大納言ハな
ゝもけゝくハあらぶ、我んなる世なれバとおぼてのゝ方
へバかぶわなくゝゝけるひ孫ふて、苦ゝゝふて業まらせ孫
ひて、中納言、大納言ゝ成ゝゝふ宣旨ゝぶ日つ見を
ゆゝゝふ大納言、わぶらふけるけるけるびゝゝふまを、祝
にうゝゝけるこバれ孫ふゝ、功法ならんとゝゆ、法けるびよ
おまゝけて、孫ゝてさすゝ宣業のいのけにても迎ゝふゝと、
人にもぶゝん言ゝゝするゝまゆ、かしをゝけわて思ひ
つよわて、ゝゝ居て内へまるべゝゝ日入せ、九方けすべゝる

元おらなふとても、我子ども七人あれど、かく浅世(ぐんぜい)生
うれしまめえをつるやうにつる、かくてをけるは佛をすし
にても速(はや)なりけんハ家内なるあるんとてそ
まけれ子(イニ)三人聟とれ、ちそ我そのわく
ちうハきつめあまちうへうき祇のつりうう見せ
つれ、ふの長ハ聟ぎ別りてつふまたる事もなれど、は
かへり見をかくうれくるのへりてハ祇のくちち
しての赤死(ちんれ)ちバかりにハをとるにまれをんちごに
まれ、死よ法のふまつれとハいとさがういひます、かく生
バかの方、悔しくと死ねうと思ふ、毛日に朱ていと法

けくちうそ紀て、男君女夫一とふ見るよおハ寸ほどうて、
辞こすりふまへバ、いと恐しくと中先孫へバ、大弱元ハ祖の孫ハ胡家
もうこくもおはしまさず、たゞあの夫ちみそうれく
くかゝじけなく男孫へこみ世るはうふまつらで死ぬと
も、大かゝち護(まもり)とも朱ちりてなど今じ法ちとヤ孫ふ其
より正(まで)ふまして、尤の大いどのよ糸り孫ふて、又内ヨ糸
わ玲ふ人くよ縁(うち)ふまふるもおなじやうにて、猪(す)ちる
るもなけきバ中ず、大納元ちるよわ卧て、みそ(あも)くちる
ちうし孫ふ今ハ聟ばうりも思ふるまけきバ、死なん命も
惜うぐ寸とひ卧ふまへり、いとよいく放孫ふと中孫して、

大ねどの小ぢのさわるゝ孫へり、わるくがてしけなくうれ
しと思ひてまへり、ほむにあめ五人集ひて、ぢくふまつり
なげよ孫ふわるとに、業ぢ子どもぢくふまつり孫ふハ物
も思さに、大ねる爲ぢ小の方ぢ傷おいすることをうれしと
みじうめでたるものよわるばして食もまわりてまふ、海
づけをれん糸りたるひとるるあもしげきく成たて
孫なて生法とよ底ぶしてんこどもわんたるにはらか
ら思ひきぞ、あどちの中にもうふそいくあるれば論
なう怨こぶくもいで茶なんとて、城苔をはまへう
喚きをて、ぢくの庄ぢ勇、佩刀など取出て、えらせ孫ふ

ろ、ゆしまそしまハ大ねどぢ小のこうにまり孫ふてをと
こども笑をゆしにてもうらふしと思べうらぞおなじ
やうに力入り、秋よ孝じしるだそ、きらし人くしまに
なんまろくよ物こらにる況乎許多のまぐろかつ兄
る正思よやと思へといくまかしうのまふをきんぶち
ハちわりとわばしうり兵家もふりてうはあれど、彦う
宮くよ思しとて大ねる爲ぢ小の方にたてまつり孫くぶ、
小のこやて法ぬのこてふしふるぶもハさしものこまひぬぐ
けれど、又侍のくに法こやうえざうん年ぶろわこうより
そひをわて六七十になるまで兄をわ、たぢみをりつ

ゐなかのうつる、子ども七人もちりなどけ家をおのれ
ゐてらぐらん、子どもをそこう、家ゐ者をるなくゐり
まゐて田しも拾ひ、世の人は税はきらさらひちゐ銭
なん、なこのらん財いうゐせんとい田ふまゐ、大将どのよおい
きわてハけ家ハゐゐ方ハぢともいとくくゐれん、男君も
いとゐみもしゐ、みつ兼ふりばもまゐゐまゐひてん、三
条もちぢかりゐはくわてきりてゐいとゐし、をみこに
わまてハ夫ある子どもハきかぐ〳〵家もちゐもゐわ
きゐゐれハらひもてゆゐバ、てもかくてもゐなん、
れのぢ身は二人は子どもハちゐゐとおぢらゐん財ハいづ

ゐゐりかをんゐ甘ゐそ、大ゐゐたてゐやいと迷ハなくもの
をまゐてゐひゐゐといひづ〳〵て泣バわゐぢ、子ども思ひす
ゐるにハあらゐどうれハ〳〵ゐゐハせあてなくゐも、世に
大ゐりゐもゐてゐはハじい年寄は若男にハ子どもをゐる
まん〳〵りゐもゐゐふまはわてん、銭ゐを我代りとりゐ〳〵
てはゐふゐつれ、三条は家ハをゐい〳〵かハな性ゐのは銭や、
大ゐぢのも兄弟ふゐハ、ゐゐしをゐぐ〳〵よ物えをらで
死なぢ、いゐぢひなゐ者を思すべ、天ゐ下にのゐゐふと
も、ゐくハえをゐらぢけふあはゐともゐゐめ身をなゐゐ
み弟ひゐ、物ないゐせゐひそいとゐゐし花とのゐゐバ、

わのうとみおいづれど、子どもあつまりて、云をぶ、大ねどの
きてゝ方見ときゝていとゆゝしくあはれと思てゆゝ
かゝるのぶえゝうゝふるついとうとましきにはたゞ何
をかもなくゝびそ、きん達ゝ所のまくきらせうゝへ、
涙ゝてゝになきもくゝ仕つゝうゝへるゝ思はめるゝ
ゝ仕らんいとゝんぐるゝ、行きやきらを孫へとせ免
申孫へばゝたゞ、おのれいえゝらにまじ、おのれ死きべ
らん時、ともかくゝもんゝとし孫へとて仕らゝ中ゆゝうゝふ、
よゝ和おびゝゆゝ仕ゝ系にゝうゝ仕なゝども、皆大ねどのよゝ
り孫へ、枝ゝゆゝ物ゝと思へど、祝の仕ゝうゝきに仕ゝうゝふ

人乃仕者さゝ所いゝべゝうゝにあらゝばゝおもゝふ、ぶきべゝうゝ中
ゝゝきゝてめてゞ大将殿はきゝこのゝうゝをゝうゝゝうゝれし
ゝ、仕ゝうゝにゝう、所、国ゝうゝるめを入ゝうゝと、京へゝゞ中孫
て、ぼ系ぐしゝうゝめをんなゝうゝどもゝのいゝとゝあゝうゝと仕ゝり
ゝるゝゝゝかへゝりみゝうゝへゝとゝ中孫ふ、うけ孫ゝうゝり、身は
ゝ姫んゝうゝぶりゝはゝこの俗ゝ仕ゝうゝかゝまゝうゝらゝんゝとゝのゝうゝへ
ゝばゝいゝふゝゝう仕ゝゝよゝうゝとのゝうゝふゝむゝにゝめゝども仕ゝ云ゝう
きゝてゞ、君と思ひきゝれなゝど、ゝうゝゞしゝくゝのゝうゝふ万、
にゝゝゝけゝく成ゝうゝへゝばゝゝれもゝくゝいゝみゝゞゝくゝれゝゞなゝ
ゞゝく、孫ゝよゝうゝに清の孫日ぬ、十一月のゝうゝなゝりけゝい

とりも時ともあらば、ことわりとそおぼしなげく、
はゝ子どもは、母をとゝこあつまりて、悲しとなげき給ふさま、
いとゆゝしきまで、大ぬしどもは、義経ゝちにうしろ指ふて、家法
あるうれいなまに、言なげくおゝつゝ、注あるもれぐり、思ふ
ハ後の世ゝ、宵ぐゝやうの宮諏もみづからう入居なんと
言給ふ人れば、父おもぐ、彩うゝきみのどの信ゝつまふて
ほどもなく、ものゝとあらん嘲ハ、ゝとあしかるべしと、切なる
まふ、あ天もをちるゝ父ゝにもゝくんハ、物いみなど
きゝに忌ゝしかゝ、義おもきゝに、義さゝおいをすぎ
いとうゝめぐなし、夢居ゝゝひそをやゝ給ひゝれハ、

家法義ゝてならハぬひとわ信ゝこゝきん遠おなゝうあ
そばゝてはふぐゝゝおぼるかゝ疾亡せ給ひぬるを
元給ふにつけても、ゝぐれもゝるをいろぶしてゝ
と思ふ、彼とのゝハ法いゝみなゝるとて、三日をゝうゝをゝあ
まり給ふ方義は法遣りゝ、ゝ信石住いをおぼゝくあ
ゆみでおゝり、ぶゝうのゝまひやう、死の幸ひかぎ
りなゝきゝふ法いみの日ハなれもゝくきんぶち、例な
らぬ義は法遣りゝにうゝわ給ふて病義ゝハ大ゝゝ遠
いとゝゝくおもゝり、大ぬとのおハをぬ日なし、言なぐら
たいめんゝ給りゝて、すぐゝやうなどやゝゝまふ女義の

法服のいと濃きに、精きよき髪にみし青み所へるが、所
きれるええるまへば、男衆、おなげきて、
洞川、我きみぐまへ流るひて、衆が袴ぐふちとえ出ける
とみるまへば、女衆
神楽寸、洞の川は流れ流れ衣とりみるすがありける
なぐやえ所して、流返りはるき所ふかどよ、三十日の内をえ
きてぬれば、今ハうとにわるり所日れ、子ども衆やゆとのさ
まへば、衆つぐ染名まもあらば、法男子九日はて、わるらんとは
所へ衆ちるすなん衆ハおきるけるきかれくてはなられ
ぬるのに成ぬ、この夏うてなんしるるちるみるうはその

るなればとて、大切夏いを伴かめうぬ捜るまひ々あ、子ぶ
我をくをほどくるひて考るひ々れば所をきうて、
きらくし和法るに、なんをけるるはて、去将夜、いまハ
いざたまへ、新屋にもでるむるとのるはへ々へ所ら所、今
そうけてもかく法るなめるまひろ、わきれざりけると
中所そぐ松ほるむるぶきなんうしなよ人の内のハ
里に衆、よるるうたぼきれうしご角とるう男ハめとの
たまへ、ぞはるる法るる、女ぎ衆達ゑも、衆るるハとひ所
きあやまのるまふ、銭弟男、かくうこ所ふとやて、彼おぐ
のまれとて衆ちしあつめるまひし物ども、所るの衆

の巻とりをして、そて系わて寛うゝ仕れども、古人の云
わるゝ仕りしかぎなんとてをれば、大ゐる寛ろまゝ
ゝれば、佩刀三つ、ひとゝ仕い後ゝ勢しく、そひとつハ
仕ゝ寛ゝ、わろゝ仕ゝう仕巻、て仕図などゐんゝけゐる、
大将殿、寛ゝうハあゝ仕ゝ雲ゝをゝて、ハきゝうじ彩ひ
ゝれ、此の家ハなどかきん達ゐのてゝ仕ゝ中ゝハを
彩ハざりし、別業のゝかとをしてゝ、女系、系もなし、
ゝゝハかゝう久しゝう仕ゝてゝ、社ハ得ゝゐの方にをり
てんと思ふとのてゝ、男系、いとゝよるゝ、乞ハ系
仕ゝてゝハ、ゝも、わの社あれば、おはしなんみれゝゝみ

のゝとゝもなゝんと、お諏ゝゝひ彩日て、城ゐるちかうゝびをを
て、そゝ絆ゝゐゝそゝゝゝゝもハきゝんなどいとゝかがゝゝハ
元ゆるそ、豪家と彩ハしゐわてゐゝと、おわゝひゝゝん、バ、
仕ゝゝゝさも仕ゝゝ、もとゝ和し彩日し、時皆仕系て与られ
ゝるゝしゝゝ申せバ、ゝゐかしゝゝも考ゝまひんゝるゝれゝて、に
諏ゝも仕ゝて彩ゝゐめるを、何ゝゝかゝとゝにのゝゝん
め社バなんゐのゝ彩社、ゝ佩刀ふゝつハ、きもん
ゝ仕と、そゝゝと、一つ仕ゝ、三のゝなわ仕のゝ巻と、わゝび
一つとゝめゝる、系ゝに系しゝたゝゝひゝん仕心
ゝばゝのゝかひゝゝやゝうなれゝどなんのゝゝん、バ城

前ゐいと不法きる事いみづから仕およ仕らぬるも
ども、あるうなんきろしめしべいそんやあるう、あか
くきれくちと云およ仕りましあるべひていたれも
たれもうれがしてふるあ法もおをとて、と
らばかれ、あやしくも云れ自ら心いこのさきう
きむこのばうてゆらめ、かくに兄弟へばうにえるまふ回
じるう、此矢はおの社あらんこのぶわそけてもきてんうち
できをれよ人あればうはもしからうてもゆう
四の矢なん四ふ人にくなるやうにものし弟ふるを
れのれ一向うきりゆうんと四ふふるえうちれ浮ふかハ

ん平加へられよ、今二とふろをばけをとこ達うつけて仕
うふまつるべとものつへばば越前国畏りまろうぶまづか
うなんと和し仕らんとて立ばそ返てなどきれいん、
取て和しれふなむつのしおなどるをのみいへばとめるふ
れびハれこのて人に縄ハきつうハせ弟そんとゆうまへ
ばいい用なうんをうハ和きんうを和人達まあらもばと
てきひて縄をつまふ、きこれ方きん達に、かうく
なんのつまへるといへ若小の方此矢いを勝つるよ、
いとうれしくのつまへばれ家ハと仕ば代らうとえる
と四ふ平、伊を始うればば歳ふほの矢れてのく物し弟ふ

ゐ、何角うれしあるまやと云に、越前国、たゞ服ぶちう板
たゝきて所さゝぐ紙をしてゝ、殆ぐるにハおさまをあて、の
前くハ痛かしく、脇うへまるゝ物をけるゝ、面いてゝこと
うちす人のこゝろをまつらを受用になし、野いん
とや、知しされぼしくるほどハ、のバうは此面を見おぎら
社ゝまひしひまつへて、かく然切りかへり見ゝふ法
法をぶゝ、見えて、かくのゝふ、ゝて苦いうあるさ方
に、人きゝも家角うち知ぶるや、為ゝぼ行ぐおとは
野ふといへ、おゐのゝ、何むのぎからのゝくか家ハ見付ゝおゝ
ハ又なればゝうせゝにあゝれ、取ぶゝて為ゝぶやと

ひゝゝうん、何ゝの俳ゝゝゝうんゝゝゝゝ、越前ものの懈のはん
や、知田ひ知ゝゝゝハめゝかし、法ハゝぶとはんゝゝこゝはし
あゝわゝてゝゝとおぼすゝらめ、ゝ文九法つけすけゝ成ゝ
ハ、たゝの考ゝゝふにゝの、京ずみハこの長れ家国ゝて加潟
せゝハ、詩ゝのをゝぶ、そにゝても考ゝゝへ、ゝとのこゝも人ゝ
ゝゝなゝうんゝゝハ立ゝゝれゝ、見ハ家も野ゝをゝあゝ
赤紙じ野ゝをゝしゝバいゝゝとゝゝゝつゝきておゝせゝゝ、
ゝゝゝだ田ゝ何ゝをせゝ、国のゝへゝゝゝるゝゝどもをゝれ衣、
うゝゝゝあゝゝあゝよおぼゝゝゝゝハゝゝゝ、京絶らも国を
治めゝゝゝくゝなゝゝゝゝし、あゝゝゝゝゝど、書をゝゝゝ田ゝゝゝ、

えうきらもで、今にてもえうきまるまじきハ、子ハ老れ歳よ
ぞかし、おのゝ生うらんるどもぶに、かくおろうてうふ
まつらぬ、ゆゑ、ハかくなるれきるゆゑ、ゆくゝをゝ、ゆくゝまろらび
やえうきハめと、とにかくうゝ云まらん(き)ば、ふのオ、ハかうと思ひ
ていらへもきそ、ゆゑ返りいうぐやえうんといへば、ふらぐ不知物りく
ぞひうみうろとかしこのはしういくぞやえうまして、おうと
よきうる知り、物のうろまろうらん人、接をかりてやせて
とゝへ、ぞ、人のみうよ申にあらもぞ、ゆゑ身のうめるもし、三匹の
兵のおまへをもいうまもゆゑまらんと、ちるどゝ
ゆふ小のうれゆゑまるゝ、ゆゑうひとつ後

れゆゑんぐうかくやハうとゆめれハかくゆゑうのたまふ
るゝ、まろハ伊のにんうゝ、我ゆゑらん母波れ左ハ年う
米一斗ぐに出くべうにあらもぞ、今ひとつハ誂申にてたま
やすく物もちの法づうゝ、ゆゑらぐ、毎の度れえうまへるハ
三匹の物出くゝ也、かくゝ幸くあきハ、糸ぞみぐえられ
たるしとゆいやみれれど、誂もくれとぐのえおきうまして
を皆兄弟ひて、かくやハのうまふべよ兵兄にてれぼを、論る
くかうみうへり天法づうゝ人ぐに、かゝ法をもう方へる
といへ、ぞゆゆうゝ、あ角かうゝのはしいうれらひーづ考て、
ゑれもくゝ皆幾しけきばいうみううあら考といふゆど

う、さはつは仕の事あひて、心ともひろそれば、夕まで
けまぶ〳〵ゝよ人ハかく〳〵ゝに探うえうかゝうぐあ法、まづ
ホのゝうみゝうにれハきしほどハやまり所ゆしごいきゝか
のゝまへ法るゆゆ右さりれうかゝんぐゝしまは年はゝハ
ひも、あゝゝあゝよ考てぐひて、んやゝらかしとちゝうハみゝかこ
のゝまふめりしがとのゝまゝくぎゆの方いのゝで赤紀なん、
まくみあゝきものゝうみゝゝうゝ人ハ羅もゝんとは所ゆゝ、
ひゝ勇かゝゝこゝうしゝくゆえゝさゝせゝゝとゝて、二人なゝぐゝらかいゝで
きゝたて赤ちゝゝぐゝう、やゝ、ゆ法ゝのゝり云ゆせと招
紀ゝゝうへどゆゝ入ぬやゝうにていぬ、九法つの仕、なゝぐゝのゝひ

ゝよ、紀をもちまりけん、赤ゆゆゝのゝよもゝゝうゝなりといひて、
ゆ示へゆゝとハ法ゝもに云合きて、大ゆゝどのゝくゆえゝゝまふ、
かゝゝこまりて所りぬゝゝにもそハ反ひゝりをゝん、ゆゆもも
しゝ紀ものゝう田ひゆゝえゝさゝう寸法べゝゝたゝゆハきゝゝる法ゝの考
ハゝゝうゝよ人ゝハ、むゝのしのゝゆゝかゆゝゝうがゝんゝそいゝのでかとゝて
みゆゝるを、ゆゆ心ゆげゝのかひゝゝゝゝゝやうにやハとゝて、ゝゝになん
たゝゝハりゝとぐゆゝる、ゝの反ゆゆゝるハいと心ぎゝふゝうゝゝる
めゝしゆゆを、あぐゝに物をゝゝゝゝゝたゝゝハぐ、物ゝゝゝゝゝなゝゝゝゝ新
にもゝいゝゝゝゝしゝくゆゝゝるを、考なゝむゝうゝゝゝゝゝゝゝとゝゝ考
反ゝゝゝゝる汚ゝゝゝゝゝゝゝ

うゝ、返て幸法よやあらんといとあやゝてうれいな
どもていくさのゝまへらんものをそてこゝと嘆くへ
しけれどあ角物ぐるわしい、たるものあをおろかくも
いつこの角とゆゝれ、方ゐる角の中野ひてうゝ人のもゝへ
いるのばゝろ、物ゝと思ひうゝるハめ小ゝるゝ乃は世ゝのゝだわ
ハたゝゝて居ゝハ三ゐ社ゝ思ゝまり野ゝ同じるゝはや置
野つれとてみ角ゝりうゝまひめ女ハゝまゝ糸りうんか
しゝにもわゝりうゝへ古とゝゝは代りゝハきんゝちふ
のゝうゝをゝろハゝてゝまりけゝうふまつらめ行ゝすも
おゐつのなゝうもとのゝうへ論なくおゐしゝうんをのみ

なんゝれゝうゝるゝとゝるゝど、あゝれゝかゝゝひおゝてなん
れゝにゝゝ流おゝぐゝおけをゝ時ゝうもをゝのゝき物ゝ
にゝゝゝゝゝゝゝゝ、きんを道にもまめなる物ハ花中あか
つゝにも墨びきりうへゝばゆの方、ゝゝ我ゝゝ男女
ゐれどをゝぐハゝぐハゝゝなゝるゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐるいゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ、ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
野ゝゝゝ流ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃ゝうへを出ゝゝ、あひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゑむ中の美酒をとゝみ九ゞ毎、ゐいと多くして、文
紙金まんとて、ゆゝしう、つゝまれ、美濃う
いとけなくつゝましう、城者を年なん代りゝゝ、ぶ
国のゝいとゝなくゝなりけるバ、ひとゝてよゝて、郎そわ
度になつゝ、はつのすけハかゝるゝ宝ぬ、なれもくは
はゝ流ゝてと、あつまりてゆのうゝにゝるらびやをゝれやい
おんゝゝゝゝゝかぬ、今ゝわハまほゝゝ酒をて物ものゝ
はゝひろといへゞ、ゞにゝゝわりといひてけり、ゝゝ度はつゝを石
ハ、武桜のゝゝゝゝびしけりとゝ人世ゝゝ云、たゝゝかゝくんゝゝゝゝか
きて考ゝまへバ、父大人はせんとゝたゞはゝるゝも、先ゝの義ゝ

のゝゝまひのゝはゝるゝをあしかんゝなゝ、ゝゝるゝとゝゝるゝハ
せゝゝほゝと思ゝゝるゝから、えゝゝゝゝゝゝ、家ゝゝゝ、とゝたゞはゝ
るゝも、せとの二たゞび三度とゝ、ゝきゝりてゆたゝまふゝるハえ
ゝゝゝゝゝゝハで去ゝゝゝバ、月めゝゝゝゝゝふにも、数なゝゝぬ
も、はゝ度乃はゝゝくにてゞ戒ゝゝる、みゝのゝどゝはゝ伯父ゝゝて、か
きゝりなゝくゝれゝゝゝゝゝゝ

にいたるまで世の人もかくきりて大いどのうわ表、九方に
どもようとてはこのふまつらめ、それをそで大い反もよ
しとわぼしうるとて、はこしものをみるハ、糸りつゝふまつ
らめ、ちけきバみ毒花ゆうてをみ所ふ九の大い反に
ハの方、ちよたなもむもはきまぐいのめうき所ふとの人
なるうちに、はゆ用をかゞわなし、馬鞍ゆ御ぐて所ゑ
わかくこけしうすはるゆいちにのこまふるゆあれバしかく
下わて、あこのあるなく継てうふまつれ、おろかくしとき
かぞ、ゑくかへりてゞとのうゆふかくとはゆうれく
て、銭くうゆあがくとれあひて、かくなんのこまふと、はゆ

かで、かくるくてうふまつきとゆ所へバはくくにかゝわ
くるゆにくうあれといくぞ、ゆれ矣もいくう婦くとおほ
しゆわ、今いはくゆ俗、こはの矣ゆうき人あはせんと、人くれ社
ぞゑるにさるべよ人なくうちをしけきとのくゆ
ひくうあれハのくゆ、さんゆ矣ゆ、なつゆれはそ衣はは
えれなくどいとゆ所ハ、はゆこの子はこ反乃生てたてまつりはは
ひくゆもはくゆわていとゆくのに、はくうわれまくるはくよ、
ゆくづをきくゆひはくるゆもくるゆなしはゆうみはは
待きたまふるどもいとはゆなくて出ずはぐめのをとこ矣
ハ十にていとゆきはくるわくゆ宮でのくすともあゆ乃

ちすべうらもで、笑くおハもゝれバ、裏宮ゝてん上せゝ勢
ゝゆゝふ、書をゝゝゝゝゝふにも、酔く獨くしく、ゆゝごゝも
いゝゝゝこけれ、ゝおわゝうおいしゝゝる帝においしませバ、
おゝび歌ゝめゝつゝひをかゝゝゝものゝわゝぼゝて、笠ゝ
笛吹をゝゝゝふ所をゝゝゝゝゝゝゝゝれ、ゝおゝゝぐいと
ゝゝ愛懐と思ゝゝゝわ、おゝぢおゝたゝゝのゝゝ愛ゝ嘗ゝゝふ
天ハ九ゝゝゝなんおハしゝゝる、ゝゝ兄ゝてん上ゝゝゝゝゝゝう
らやましげゝおゝぼして、家も内ゝいうで糸らんゝゝゝた
まゝハ、ゝゝゝ窺ゝゝゝゝて、ゝゝの今ゝハ云ざゝゝるゝて、
ゝゝゝてん上せゝ勢ゝゝゝハ、ゝゝおゝゝ、まゝをゝゝれく

ゝるもゝをゝゝゝハ、ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝよハゝゝわて、かし
ゝくなんゝゝる、ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ、
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かちらで男ひやえ孫へる、ことわりなるに、おほきおほいおの
きとしなんら千に余るまでひろれば、ひぐりの大いどよ、
袈のるすはのふまつり孫ふ、幸の作法いとめてこし、
唯男ひやるべし、舞ハはふるはせさきを孫ふおとらぶ
きかしくくちとろろなどがら舞くるまひけきバわゆぐ
おとど涙をおとくてちん天きり孫ロ人ふ、かくおぐまて
ろそ、ろてろばいのめしう志るるるへバ法徳ハいゆるはりし、
けの南ろて月日ろて、女房服めるるるふいでれもく
子どもお宗ゆるほるて、はそてのるなどくしる孫ロ
ろ孫ま、母かくるどものろろびを志けるをはるくゆ

よろこびられバいとうれしくとなんわがしるる、九はおとど、伊
かでいきみまろうよ紀賀どわせんとおがくて、そろに、き
法ぐよどれとおぼしるるるほどろ、中納云の、筑紫の帥
ろて下孫ろ、にそのに書矣ろりけるを中孫ロて人が
らをいるるる人とろおぼ給ぐて、ゆろ給りあひさ
法るも、心ろぐめてかろひるるるるてさるべるをりにこの
るるはるるをはのめし孫ロるれバいどるるるる法
るるとや変わてげり、たのは大い変ふのるるにや孫ふ志の
しかの人をるんいひちぐりる法、上を迎めるもあり、人
ぐらもいるるるやなん男ふ、この矣にや婚すぐる、尼の矣

にやあハすでよいづれるようとのつまへハいるざはんつ宮め
ゑ孫へ万ろハにの夫にとなん思ふいとゆゑとるさし
うハ、わもひもゆし孫ゑざのわにとのつまへハこみつど
もりにとぶ陰べのなわ、疫してんゆはつうにさのつまへ、
ようつうわもひ〜ちハ、ちにてあけきんとのつまへハみ
にてハそくともさんみでのらわつらんとそれで西猪い
おつかれ牡蠣やなどそうつうぼくみつまへなどゆ
えつまふ、ぼとあてかわをゆのうく嗅ふつて寄ゑ
み孫ふ、自らわつあてやきんと思つども、そうしてる
るみてなん、かうくのつるをのつまふいうまゆづゑ

るにのあらんんよてハあわど、ひとりてるゆゑハ思ひ
のゆなるるもあり、ぼゆいとうき人まあわ、たれもく
ゑ〜と田孫くるるすなるぞきにむうくまりても
かくもせんとなんのつうへハがわ、いもかくよ伝をう
ちう伝るまれ、あくよてるるにても、姦のきりのつうハきん
ハ、香びやえうさすづうにあら寸、ゆていとめでてるす
にうう伝るまれ、うくれんとあし伝らんとて、祝のは
もとくいてて、きうくなんのつういみじうあたる
なわ、いうう陰人くしとも、たぶいりれ時の大臣ハうりの、
ゆむすめのやうにてのつまひあハを孫そんを、たろうに

ハ男はじ、れもしろの袖ろ、いかでひなく笑いれろそら
きてるまひしを、是にて袖うろ、ろ、ろ、ろ、ろおぼ、ろるなめ
わ、年ハ、そぢうなんある、たれぐおいてはぐめ志
ろ、ろも、かぼのわ、ハえ志、ろ、ハじ、秋るまさりて
あ、ろ、わ、ろ、ぐ、ぼ、ろ、ぼ、ろ、ぼ、ろ

めにはいはの方をきってまつるべしなどいひていまぐれ
ぶふと、西方にゆせまら孔へとのつまへばはは更わって
たまへとのつまへばおはしまわ、きっとき方かうくのるな
ん、彼方いどめて孔ふなる紙をとり人のおぼしわし
ける方をいつもよれてのとなんうわ〳〵思ふをいかでお
がすとのつまへばはきみ面あの色ていとよるる
にをづきどうの教方をきらぬはるよやなでふきは
るのはるべよ、人のおぼきんもうつハ彼とよくはきぐ
なるんいとえそしうらん、ふうよ方なれハたうまわ
まんと田へやぐ、おとせんのおわハ例のうるみよえたる

てきつ法をぐふはるのふアつるに思ふてへてなん、今も
ぶうはるとて法つまひめれハおもひ新つアつりけ
ア、あハ社よお洞ぐうてたるりかのつくあ角はぐく
しなでふたるこの成孔へふべて、きばしまても、於花ゆの
なるあたるアかんそ、人もかくそでかけりと思ふべき、
おのこの云うきてぐひ孔ふと思ひてはるすきつまへと
のつまふおね、はるのへりハいつのかはんとうへぐは更ハ
かくなんとのつまへどおきにんいうれしまるやく、
たぐとかくもうんつて、おぼきんうるにきれしる孔へと
のつはへハ頭とてきめ、ふうう糸わてきのくなんとと

つるゝを中殿へバ物のつゝ[illegible]の矣の殿へ[illegible]するをひきれがり
て、ちゐ男すつるゝなれど、せすをる人ハかゝ[illegible]ゝ[illegible]
わ男のなわと、おゞしなすつくとのゝ[illegible]ふ矣きて殿日て、
ゐ殿のゝ[illegible]ゝ[illegible]ハの[illegible]ハ、正方物しとわゞ[illegible]すと[illegible]疾
きて[illegible]、[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ハゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
の[illegible]ゝ[illegible]ハ、暦とわにゐ[illegible]矣わて殿へとゞわる
けり、行るゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ん、儀の物して、面殿ゝいゝ[illegible]せんとおゞ[illegible]て面の對
きつゝハをゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

の三つの事にて、世をすなれはしらる面白の袖八十
四うて聟とりて十五うて生まつりたるもしけゆの
方八世八まるるんおいしらん、三四日のほどう、ぼ素をい
たうりかしづきまふるかおりなし、七日にちわて、
西のいう、氣法ともにうり所日めはとの人く、義
まるハきうそく一足づく紹ふ人女れくわとて、我ち人、
おもあ三人わらハひとわ下づの人ふわとわしうまふ、
けうそくどもきつうひまる儀式いとめでて、母めはつ、
ちとはうらを、なぐきにはなん来たる者きまくに出入
いうだうまふ事のかねうづけなくうれくと思ふ板ち

ふけて、時いましけるかねきるべくて、そびまて入めぬの表、
人もいふぐひなくあらぬ、はあもかく起居てうまへそ、
かまふまじうけわと思ひなくてるんをうしたるまあ
ありけそひなどをまうまぎなれば、うれくと思ひたわ、
やえうまひたんるハやねぞきば、時めきばもうひめふ
のうこいうう思ふうんと新まうまへば文度くやうま
どんなぐまたぐひまをひるせうも諫ううハ思そじ、
かくみくんあるぬくれくうう、かくくもうあ
るぐまげ矣を例のくうまゆうにやいうびいうん
やうん、思ひまて、時くやうしのぐ、たうあきりし後

なんまはだりにてやみぬれましうばと悔しうわしいちおば
ゆるぶをかしまれどいのうらんに孫日て二ところ孫ちのぐら
わたてられしうりおそらめ、ぼはきみまぶ帷の四よ寝
うまくうり、小のうこ、起うまくうおこし孫ふかどにうち
孫文もて来うち、男君とり孫ふて、先そ伝ら万ほしけ
きどかくけんとおぼするもきうんとそれん後よい必
そをうまくとて九帷の四そ伝て入うまくばぶのうこ取
てきり孫くどこうとしも取うそうぶどけどでうみやえ
んとて引あけ孫ふぶはよ、彼そぶめはもしろはうま
孫出をしうれし文をわうそをて、みうもやあうんと独ぶ

社て四ふうう、うそうまくふをきあば
あふううとはなうそのうち海はきうこをぶけうそ四ふ
数うこうとう社、いはのきて意はと
とうんをうけるはのつうきややえうまくとあれどいらく
もきうぶうをぶ、わうとぶうはうみきばうとせあてのうまくば
何はゆうこうおぶすうらんとていうもし孫へ社ばいうう
出うくくあるうとて、はうつり孫くとうそ文意入うまくふば
やくくと、祝宮のぶうてきめうまくふ四のうきみうりるも式
意はそうまくひつぶうなりというそづかくていううみ
にも出ううぶは、あ意そぐはしけやくくとのうまくば

物もなげうちて出、

家ならぬ京のみれば、あり所あり

演の吉沙ハ、ちりつもりたん

として、引むすびて、ものしかれば、わらべあり角ゆうしのうぶや、

ぬくのへわるハ、そでゆみめるこころ、杖をしたれさかるま

へるとまいとをかし、ほうり物うづけさせてまつり、そちハ、

京のサハるなん、新よ京なん日ゑるうりたれば、をそち

ちらるいとをかし、がうてたのもいぶのよハ、ゑるの夜れ

るいよはじめるやうにまうけさしつり、人いぶがし

づきいるるになん、をそ出れんぐしもうほものを

と、いとおかしきるかわいて男ひきる、細のにとに入るま

へ、ちにてるはじめ、いるこそ社ハ、れるくのなるん

いとおかしかれちまへハ、女ぎみ、苔我をそもぐめ彩て

るの男ゑをられていうにおもほしたん、あ女ばハるま

めを足ゆしるおぼして、侍くのに、まゑ足はじめ彩ゆし

をわ、そぐめてやんごとれくのみれもほ方ちりたんと

のくまへハ、ゑいとくほるをみて、けて、ゑぐとぐ彩

れるるひてちまうよわて、かれれちちかとひて

られてきいるまれし板ゑそいみぐきんぐしハま

きわしかうよ板男ひめしうるしちゑそれ、ゑ一の

なひるるのれ、ゑぐ彩ゆそいみぐうてるぐめをて

のちにそそろぶばこのわかへり兄ばやとるん思ひ
しかば、母はそのるもかくするぞふのつこはうあし
と思ひしりや、景ぞみるどたそひ初ゑなありゆき
のつきへばうてらてもうれてしうのるまふ時ゑこうあ
りとみるまふそるめれば、ばろちゆきめは供はしく
に物うづけ、響なぐをちち旁てまふ四日より日ふけ
てなんぬ法、物くしくきけうめやにしだも
ろはとひとりいるすりふぐるにあらぞ、ろちは云、
きのわそぶ法づきほどいやちかし、そそむぐまるの
どそ孔いとおかこうるを、ぬるまばまのわくそれば糸る

に、そそろりてなんあるまにぞ、かくそそへもなしうわ
るまひのみそぶらんといきん父めしつめてばやはし
ほそて日はたぐ十餘日ろそんあるとのそそへば、ゆ糸、
巻そのなる法ろ、うみもしき人くをおまてきた
りてハ、伊ゑ侍とのまへば帥、さハひとわはのりそぶれ
とも、たぐうくひとを日ふを日兄そまひてやみそまひきんと
やと、わぼしるぶらひそまふきはいとやはらのし、ゆまを、
うちうちハをかしげるあり、ちやいかぐあらんとあの
ぐおもひそれどこの法やんぐんぐとるよ人乃わぐとしゑへ
るろり、ろふあすそぐるぐるに、きつぐそろひらぐと思

ひて、法ごろに行るもきつゝとて、ゐはかうむつふ
きばかりきうはあらめ、聳とり、いとくもつふるはとれ
らひしきふて、はおとゝあきるべき人、もつ方じなは前
にきえ所へり、車こつしてわりなるまめ、あくりあり
てるゝ子ごろ、とハ行ゝきゝ系らんなどいひたれば小の方、
牧糸きときひ、牛り所ゐつ、系ろひてありき所ゝ系る
もきけきば故のつぶごろいつしのとも代り居ちふ、う重、
はんいうはらんきんきのはゐ、あゝうゝみごうもゐくごよ
かきふで今は時の侍とて、おしきてはらんのなど
わゐのどちいひあへり、はぶめは腹とて、ちゐ所ハ指のち、

ゝ所ハ義人ち冠まはりてあるはは死ちる後のを
んちご十、二つちるをのぐなんの自けるを二人をなんぶゝう
形ゝきとてわろつく、持のちる式部の君も送りをん
とて晩形庭う奏して皆ぐるにろちかつけ物し所人
ば人ゝのおぐゝにとて、給二百疋深ちどゝ、みれ嗚つけ
まゝれば所きみゝらゝとならゝて所ふれんうなしゐ
やうんやうもわばえで、母きうゐ方に云やる、かうくの物ども
せきとて、給ともはあれごいで志ゐらん、反ちはぐる人
人も笑うみゝていひあそべ人もなゝいと云て
くもわばえさせきゝ所ちる人を見時ゝく

ぢうを、思びてわらひへと云やりければ、ぶのうこ、ゞおをよ
びて、かくなんいひける、板さん思びてらん、車ゑびて
とのつまへ、ばきのびてと思はるも、人を所きらでやゝ板
なぐちるにきてら〳〵犯るまきへる、子引さげてかく
らんいとみぐるしうもむうせよ人る書はゝちとて十
ばうあちるひるをうちハ喰ゐて作うひゝてまふめれ表
いとうハ社ちあり、表九の大い表はうへうやたゆまふてよ
かしとみゝてまふぐ杉り野へうさいへで、北の方いを強いを田
ひて、あの母はゆ活しなくバ、祝子のおそても天でうぶし
てんぎうとて、なぐ蜘蛛ひにひそみ野ふて行るもは表

のおそをんうぎうハえやきそゝ為ましかめん、家そて人
をきてでへしが人ゝ考ゝが、ふ表と成ゝるゝが祝てよ
る、又表ゝる、同じぐそにいらくゝるゝゝなれ
とゝてほへ表ゆ表きいのは行ぐち野らぬと天て行しゝの八
いひあはを野ふびんなゝれバゝの中作るにかくさいもむ
なん、いとゝゝゝ活ゝ々社ゝと表色ゝろ
ゝべどゝゝぐに色めれバなる田病をてかゝ野毛めける、
ゆ表、九の社はい表ゝゝ系りてかれうゝにかうゝるん
作りてる、ゝ表ゝ年とゝていはで表ゝ〳〵天ま田〳〵表給
とゝゝれバ小の方ゝとわりにあれきやゝしをり

ゐへ、のし、かね、帥もろもろれとも男ゐハざらんす、ぬと物
しるとひなん、びんきうるべきといへ、ゑぎきこの方ろれ
とけるべきる、けらバけみづうらおけて、うちけやんと
男に、こせうろもとていとこひ〳〵なん男ゑこまつ銭、
ひうこらけまう男社こうゐ、こほ〳〵おハすべこほど
も、ゐゑ〳〵ゐりもぐくなく成これバいとあハれうんぼ
こうゐん、見こうま社ゐこうゐ、こうゐべこまゆうに京すおこ
せんかぎうハ、ゑきらんこゆゑゑゐゑんにつこて、うこうゐの
でうけ〳〵ゐゑゑなんゐゐめこゑこでひて、ゐうりもむう
へもきこうへ、其ちひここ矣ハゐるすハまゑらこせゐる

そけこそにて将てこぶり弥ふとも、一人おハきんがけんば
ろゐ〳〵こて北の方ゐろへ、きらせゐふこてゐこきんこのこ
まへバかゐ、いと思ふやうにわるもひやりまこてめでたくぶみ
弥ふうゐ社〳〵うあらはかし〳〵よけんてうる、家わやの水そこう
後ぶち弥ふこうゐ、物いふこのひなゐゐと思ひていこうこう
弥こうよハきこうゐ、こうバ考の物しけらんこて、殿へいくもく
海〳〵ゐゐど、言〳〵とわるひこうこうあらめと思ひ
て汨おち女君もわれど〳〵よおハす、いので物やゐこうせんと
いへもそうこうにてやゐ弥ゐんこよとあへめこすならバ、
こく入てやここうこうへといへで、お将みて、ゐ家くなんと

いへぞ、あぎみぐよりてのでたいめんをむさくにもいとうひ
くなんおもほえ所へばいこのでらをりうんときのふやこうり
しとのうまへばそちかうらへわうり所へば、こうこうろ面ひ
せんほどゝ物しくゝ色がおるなんなしうるべうを、秋くく
ともちくにうこうらせうまへうし、人ばらばらろ、悔くく
をれぼうめ、きうれき人ばうりなんうれを役ちまるべ
くば、放きうる方ゝおき仕りもむ、京ゝ物し所ふべうる
ハぐよけふあすぎかわくしたいめんなくて去いうでかそと
のうまへばちぶめしもゝ海くゝ、手年をうんかゝちうもな
げうるめ海といへぞ、うゝ仕、きやうろうゝ仕ぶめてうるさ

にうゝしきわうまへ、そうゝ地ゝ糸わ所えんるうハ狂あゝくなん
みうゝといへぞ、お扱、ちらばかくなんと抑ゝ仕らんとうるみてバ
四の方かうらぶゝうくゝそぐ仕ちうし所へとうまへばうけ所
ハわぬゝて物め、母ゝの方ゝ仕海許ゝ来て狂ぶゝせうまへるお
ろ海しさにうゝつるやうにかうゝ尤乃大い面のうへ乃ゝた
まへ海ゝ、しかくゝといひて、幸なたるすなれど、人ゝおとる
海ぶゝ方あわかくゝくちろ仕ちうみうまうし、か心ゝ幸ひみるもの
なわゝれゝと云ゝ仕ちうゝ海べうとを、かぎうなくゝうるゝと
びて、ぎにくゝうもわぼしまわけうゝれ、この天もいざ
まへ、ゝ夕ちにてもゝ思ふとゝ戸へばいゝよのうなうん、

あま
型なるやうにしうたらんと云、時めれば、そうてらんのいそ
ぎしに、ふるぐるかちる衣どものなまぐいとくゆし
れ、かくしたうにやあらんとのうまふ、左の大い臣、わうり
ふとんゆて、ぬ衣などそあざやうなもあらうと思て
わていとときとげくきおまうる法衣一ぬ、みひめ玉れ法料
ちる一領ちひさ紀人ゑ見を きりてまへ、格ゑハあらハな
法るのきものぶとてきりふふのうさうぶるすさ
がうぶりない人ハうみうるゑまうも、まゑれ法をうう
えるぐうれ、ゑゑ七人あるどかく細うゑんうらびかへ
りえるやハある物のはぐめゑ、ぬゑのなうれきうう

つるをれをひつるに、ぬうるくもうれしくもあうれぬ、
きいうりもんゆまうそうぶも、帥どのへいうはううひさ
法ぐのかぎりなくうれしきしけれ、見めれば車ふうれ
してわうりふるめぬれ玉ゑ玉れと思ひて、ゆたの有
きゆかう法むにめハぬぐうれほぐう、いと大きに、をかう
ちうぐまうてかれば光かゑなでいとくのなしうおげゆ、
見をいうにして幸てうぶう法と思ひるんみぐれ
ちる、ま法ぐゑとうふんもうかしまるといへぐぬのう、
九のれはい玉ゑれハ玉ゑのくのうひうふいうもれるす
なわ、まうがゑうる物、うれゑのきう法、あの母うり

たゞハるといへど、かくいみじくのゝしりたまひしるる
人をなどてむつかしくかゝり田ゐやけんまさるがうへ
をなん中く祝ゝちにまもりわて、ゐのれ此食室をもちん
一ゐ所ゝつる、人ゝの好ものゝ来れ帳屏風ゝりはじめてな
ゐぼゝやきこれうくもゝつゐハさら海しのバゝちゝ此ゝぢち
もいこゞ見ましらなんうゝまとらゝぞ、ゐの方いやゝ
海ゝ子の海をもゝん見る人きゝり所ゝ此あんなゝる、勤く
將ゝゝまつなゐのゝ子どもゝくかなゝう考ゝゝ人ゝおの
きハ苔ゐくゝまゞらまゝしのバきばゝしても孤を見、偽き
めハ見ゞゝら海ゝとゝゝゝ人ゝバゐめきみ、誠ゝうゝゝれ

りゝゝ云、母ゐの方ゝるにゝゝちハいゝと物ゝしゝ、ゝゝさ万もゝけれ
バゐちゝゝゝ、やんゝゝゝれゝ人ゝの考ゝゝ海ゝゝゝゝ、ゝゝゝゝかゝり
けゝとゝゝゝゝゝゝゝかゝていゝとゝいゝゝゝがゝし、今系ゝりゝ日ゝ二三人
まかりぬいと花やゝのしかゐるゝれをゝるにも、先ゝの大い海をい
みゝう田ゐ拷度まゝをゝてゝえゝ考ゝゝゝゝれバ人をゝん
やゝけゝ、先のゐ海い海ゐのゝゝ、此考ゝゝかゝゝくゝのゝゝ大い
で好ゝり、此用此世ハゝゝなん新ゝ系好ゐ系に考ゝ方
はん、郷答まゝうけ好ゝといひゝれバゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝりなし、一つばゝれ家ゐ、葬どゝり せんとハゐもひゝ
ゝゝゝわゝゝを、此考ハゝ海ゐ系ゝを考ゝゝけんとて、

仏神のきてもうふうおそふ、宮の守のきりて、人くはれ
べく侍るまふ、はは母にも仰で、いとゝくなんありける、
先の大い殿もうわしうぶち、今ハ限り条りなんとまう
れて、京うわたくさんかぎりハ法のふ戸つわはてふ、又
ふぶらんと田けん又若まわりもせうふいちせうまく
きバ、色もいとう法しまるのハきほじのあれど、きばの
ほどをるにうぶ天又れまるべくもあらざあわ、はじめよ
ア天きわうめで、下わなんハのぐせん、おれぐかどの条
にぶて、心よからんうこにうてをのふまうあ、いけんやは
らう縁なやうるづれるの浄土のうちゆる条条を

おすて、迎らんうて牛のうるほしられと、下づうへまて男ひ
て、ひとわもうぶらぶ、わらはは男人、きもづく
四人なん、拳てうぶる条に宮めりつる日のちかうるる
海ます、はうの殿てもみ苗わわつまりてそハ
ふ社をゝみ、あはきなるものをのまふ人くまわりあ
はまわて、ちうぶ紀花めうるを天れバ大いどのよ
わてきてハ、法条ぶはいきひほしくうるといへそこ
社も海ぐの考てまつる、宝法条ひのゆうわぞかゝ、
はうりひあつう、時後日うり所ふとて、社大い条
うたいめん考てまうでハのの伯ふハとて、条りる

きふ車の交うむハはきしとて、三つぢかりしてゐん
おうてしける、ふのうたいめんして、やえ弼つるるまぢも
ハ出ぢ、田ひやるぐしたれもくはせうくぐる人こに、
わのうぐいとくきてる扇二十、螺すりうは梯ゆ紀
弼の第よ白粉入てちよ人のうちひたるして、か
たみうに元ちまうてうすぐちも田みやうう
んぢせうて、人うに田ハうくうちれくく田ゆ、人も
めでたういみじとおもひて、おのく契りてかへりて、兄
弟をうふくれそくれど、彼扇を見つれバ、儀式よ
りはじめて、うそひうちに見ぢうう、んうそうつう

ぬれ、あうれつうふまうちバやゆ、ぢめびていひあつう、つうあ
てみあう、
枝べハ、ほど百ん年のつもわを、取うてゆ石むと田弼
へうを、枝みじうきちうちしていはうまゆ方をうちあ
ちうあうれうおもひうちうれ、
ちるくと堂のらゆ方のうてきうかへうあけんほどのは
るんうよ、きうんてうれほど見つてゆ人　とて、まゆ弼の
直衣櫃一ようひう、かうつうに八ふ身のはさうぐうと
うつり、うくくの織そのうちかうまりうゆ、上うハ扇櫃
の大きはうう緑ぐる幣ぶうう、中に扇百入れて、

お雪はひとりくり、みちひきれ衣ばと一よろひあり、けは
むすめにおこを取へるるを添べし、かつてのうへハはきう来
一ぱい、ちつうるハ、黄金れ多くいもを入てきたち
ひさくはぐれ第入てりいうはくきべくあどむつし、
姫君のはなくハ、
くるのことゆはれハ、そにぐちせんとなを、
きめぐもひてゆぐにたきとゑんさくなぶかれくれめ
とくちているおけくのはしやいとかくくもあるハてき
なんものとりふはつうひとりに物ぐ〳〵ゆれ来ちくう
やくさせんうあくて、

白雲はうそ〳〵ぬきくてぬきいつて方もれば
えるぎ、多よハきてる物ぐもを、人くえるもうれく、
いみじう物さくがうて
となんあるむけめの来れはかへわ、
うれよりちかまるどぐりゆえさせんとれもひて方
へるほどくなんれくれめものいくにも
身をなてえくしてくるる物きちば、ゆくもとまるも思ぶぐ
くなんあけるふの方ハれくまひのはのへりをるんえて、母ゆれ
方はとれれくうしかなくくるむすめうにくんありける、せ
十に成ハ成なんとるふいうでかんせ生ろうんとするあひ

ろで死んでなくなるバアの哀いみでうかれしうでいきれいらそ
俳のぐとハやそ云ひうしかそひてれんを作うハすにそうひる
め社をそ云ぐ時わそべほぐそてあらまぐ心づくしになるおば
しそう、ひろもあひそ作らでいやそ作らでといへぐ、母ふのそさ
家やハせるハせし、先の大いぐのくそそひしつバかなそそめを
そを形そんとて、後ぎそれまわざを考そふしけり、行こう
形そと思ひそんぐのそへバ思れ実、そそいてでひなし考づし
のほぐそてもいそ多そる涙ぐそすくせそうハ作うそあといひ
なぐそそむかる、せそうかくげうやハ形そのぐれいもわど、
かそるそ云ぐけて泣ぐかて、ゆにそそしやそせいし居そう、

そうちハ先の六い歳そ泣そうあ中に糸そ形つそ、れそいたい面
考そふて、物ぐそ形ふ金泣そうてもんぐし作らしをそ
ハまそてなん、其ちひさそ人方そぐそ作らんをらそそ
せそ勢形へ、古れかぢ歳のいみぐそかそうそそそひ
うバちにてもまそたてんとそ和し作きど、後母きそ方、ひ
とりものそ形ふとせあてんそぐそしかりてそそそなれ
ハえそめでなんとあそふへバそそ、嬉えんのかぢりハつう
ふそつそんとふ考がそそ泣うそ和れバ陽若束ひを
そぐそうづふ形ひかしそそ作る二つをそ形ふいそそふ
かそ考そふへそ、かへそて、形れそそ、ぽみきみに、かそうそそん

のつはへるもちひさくわるきるる矣ハ菜つぎ〳〵へバ、ロのさ
み十一だうわといふく孫くハ老〳〵ろそしおとゞ[illegible]いろ
きるれきるもきはへりけるといふもをかしいろち、爲のこ
ゞちみとのへらんす、行ろまんてるる向へバ口より矣、行う
ろらせんさるゞで物もなんるれバとんらく孫つぞろ、いと
いふゞひるるるみるまふけるゞろちて、後〳〵孫を
らんとわゞしろるるとけゞづうゞげるるふてられハ爲
なるるんそのゞとうちハ四ひて孫るるをみるけるを面出て
わるなる三人にて縮四疋、殘一疋、菊枝一ぐん巻めるハ
きあゝ疋すうゞ下仕くよハ縮二疋、菊枝加へてらんる

きバそちハ時をけりと四ふ[illegible]ふけて時来りて、曉矣よいそ
ぎゞゞているるわゞゞしふのゞのるゞ注くふかゞりなんるるを四
らゞびて注のきみをるらゞて注みるるほどよゞるゞのし
て遠紀をおろも紀れ大きけろ結べるに、杉菜まれ
うにもみるるるみて入ろり、いづるゞろゞと向へバ、ゞおの
ゞるらは注をゞゞましるゞて使るゞのろめるとゞせバあゞし
るるて、それバうゞものあれるるるめて、きるに八きるるり、
ちゞゞれ湖湾中るあり、況乃舟うけて、ゞるる木ゞも多
くうるるて、すけるいるをるまし、鮑やをゞるるるとそれバ、赤
ろるるる孫よいるるひさくて、舟れうるるるる四る貼名

ちかきもかちてえれば、
今いとて、峰清きるれば、母あれ、領ゆるる袖と見るぐ、
ゆゆるるるるり人を絡しいとくやえで
とおもふわ、おもしろ此物のあるまれば、おぼ名なくあざ
はしたれの言いづらんとまこと方もえて、おぐろあやし
ぐる、此の夫、あきれる云契りなどもきいのやうにもせ
ぼりしうで、思ひいづるるなれど、色をえるにぐ、ち
きぐに思ひをらる、かるはいられを左の大い変は姫えよ
きり所へといへで、母小のう、をかしき物ととうあえ
社、おもまこれと云めれども、此の夫も行ちづり

きまふめるものをとおもひて、よのゆと云かるも行くと
いひて、家をきらんとて取てぐめ、おもひろの紬はおもしよ
らざりんれど、妹どもの人をければなどいれば思ひて、
るぐにやをとてきるしけり、夜不ん人てきん母小の方かく
りとる、寅の時すぐぶりめ、車十あまわなんをけ表、
おるやあれとくきまれと宣旨ぐりれば山時よも所を
ととで、所いろぐぶりに、送りの人をも、ぐるとち、
物ぐづけてなんうしけるる、夢のぐぶちみれこり乗り
て、日ごろれ物ぐり、家やハきとのてふるをうれば、
笑ひなる形見ととひ所ぐるきこれ方きぼしハえぐる

しきまで意法ゝれど、日ごろるるけきバ、打ちはきにくわ
うちハ、持ち屋ち往うきゆて、いみづういはりくるる
ハ出ず、九せ大い夜ひとゝうゝうゝハめゆきくなつ、今一とと
ろぶにゐゝてばやゝるんのてまひくる、かゝて年月経る
にめでゝゝるどもなんゆゝりゝるける、大就者ひら
うにゝぶつゝて九の大いぶよゝ、物いとおゆくまりゝ方
ひくり、九のおゆいどゝ大郎、十四ゝて法冠、ひあ者十
三ゝて法裳きゝをまり殺ふ。二ゝ印者をも終さゞとせ
きせまりゝまふす、又おゝゝゞ、かゝく挑まを殺ふと笑ひ
殺ゆめ、年かへりてハ、姫君四ゝ糸りゝ方いんとて、かゞり

なゝかしづき殺ふほどゝす、二月ゝ糸らせ殺ふ出ずとも儀式
きゝはまれもひゆれ、かゞりなゝをかしげゝ殺ゝすれバいと
時めゝゝまふに、いとゞ宮おもひゆ右ゝまゝ、きどでは
じめさむらひゝまふ人ゝゝりも、あゝゝ殺ゝ花ゆゞ殺ふ、
持屋ち八ゝ殺ゝ糸殺ゆゝうは法つゞをゝゝは三河
ち八九かゝ殺ゝてなんをゝる、年のふれゝゝるにて、あゝゝゝう
みでゝいとれもゞゝゝて、糸り居ゝ出ゝけるかゝ法ほど
す。れほい夜はゝちなゆみゝまふて、右政大臣かゝしを
なゝゝどゝみゝゝどちゝす用ひゝまハゝバいとゝゝう老て
ゆれど、朝家を兄をゝらぬゞ出ゝさに、ゝまで糸り法わ

つるしと申なんはくしゐむべき事に侍れば侍るわ侍らん
と四郎つるうは侍て侍はゆきのゆんぐるまよりまろ
ぐるにまわらでいとどんなるぐし、辯しまる代りよ
ハ九大侍をなるせ郎、才蔵ちうハ侍らざめり侍るバ
義ちうも侍しろ兄いとくき侍りなんと、所はみや
すせめて奏侍をまくばみてのどゆうハ生て物し郎いん
ちう恵しうらめとて、左のかぐを太政大侍よなる事
り郎ふせ人まぐ四千ろなわ郎ちで侍を極めてまくる
るちと、おらぐろくあつり、はむはめは女御、后よ居ちひ
め、宮は輔すゆ、ゆおを中将よなくてきんせき勢ちひ

けるゆ、長侍の佐ちち皆よちとびし郎ふ、左郎の長沐は佐
九を侍のかるすなり郎らめ、おはぢおとぐ、系長侍のよ
けをおちくなし郎ふよちまくバ、侍ちなるとりなちるゆ、お
の社ゆ子ちちのぐりを、るははぐめよハゆで去侍らんを
申郎くバ、殺大下ハ乞ハ侍よのハ、第の五郎よ侍れバ、ちるのハ人は
そちり侍らんはちるにハ侍太郎、九近のつのちに家にるか
バ、ちるみハ右を社ゆ将よな勢、叔父にて、物よなりおとる
ゆうやハちとのるちふて、しくき、ぶくちう四郎ふめり
し、内ちうせちに奏きをさせたまふて、右を侍は社ゆおるう
なし郎ふて、かうちて兄め、そよちくうまれしらまし

ばゝ社まゐ我、つゝさかゝうむりもゆづらましつとのゝまゝ
ける、妻情きゝてゆゝとゝ云弱夢なわや、大いどゝゝゆの
うゝ社はさいはひをめでゝとハ古めかしや、落ゝぶゝ、
ひゝゝのはいうゝ社ほぶゝて、かゝゝ古改大臣社ゆの方きたゝゝの
はゝ毎ゝゝ見ゝて、孫ハぶわきゝゝゝ、なゆむゝの社ゝ、ハ家ゝいひ
いひゝる、三社天ハ中宮社はゝしげどのゝなんきしまり
孫ゝゝ孫、ゝちハ任ゝていゝゝまらかすゆ社天の家ゝ
るゝゝきゝゝ社方ゝ社ゝと社ゆしゝるゝゝわりぞうし、かゝはち
ゝゝ孫ゝを、かゝゝ天ゝゝゝや、神ほゝゝゝもわぶしけん、ゝゝ
にも死なでなんいゝしゝる、大いどゝゝゝゆの方。いゝゝゝゝ

老ゝゝゝゆわ、功徳をわしほをゝゝゝて、戻ゝゝいゝとめで
なゝゝてなし孫ゝりけるゝを、ゝゝゝゝびのゝゝゝて生ゝゝうけ
る世ゝすあらん人、まゝ子將むなゆはゝなんゝゝゝゝゝも
のゝゝゝけるゝゝゝて、みお腹ゝち孫ゝ時、多社ほゝき
時ゝハ我を戻ゝなしゝゝりうゝめゝゝハかゝ抜ぎゝれゝ
りけゝゝゝなんのゝゝゝりるゝ死ゝゝて後。もゝゝ大いゝ
乃ゝうめしうゝゝゝけるゝ、はつハ宮の四位よなりすけわ、
後ゝのゝゝハはゝゝゝ出来べし、はゝのゝゝ將社ゝゝゝゝつよ
ゝゝゝなん羅遊ゝゝゝゝゝ、社ゆゝおゝゝ亡孫ゝ
ゝ社ども、ゝ社ゝはゝなゝゝゝゝゝ

けきばらばらいくやんごとなきものまうん事の矣をバ思
ふまうしたる、尤大将右大将にてぞ、はべりきてならはべり
ぬるを、侍、母きみの方、はべ無量福はべりまうしとも殊ことに尤
うち、うちハ世間世俗なりて、大納言なりまうしわ、おも
しろき弟ハ病おもりて、法師まうしにくれバ、まうしもや
えぬなるべし、典薬の助ハ、激られまうしを病ひまして死ぬわ、
ちれのうしておそれるをそなりぬるぞうちをうまな
どてうまわ説させけん、きばし生てれいまうんものをとぞ、
をとこ君れまうしたる、母御の家司ハ、れ家やまうり
ていたとくいみじうえけれバ、むとしの母濃ハ今ハ典侍

にまうるべし、なりしのそけハ二百までいまわとや

寛政十一年己未仲春日

書林

京都　額田正三郎
江戸　須原茂兵衛
同　西村源七
同　宗七
大坂　葛城長兵衛